

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

高見沢 和

高見沢 和・プロフィール

1952年青森県生まれ。小学校時代は、朝から晩まで昆虫を追いかける生活を送る。中学卒業後、名古屋の染物工場に就職。その後、実家のある弘前に戻り、看板屋の仕事に就く。2年ほど勤めた後、上京。製本所などで働くかたわら、マンガ原稿を出版社に持ち込む。20代前半で、村野守美、上村一夫のアシスタントを経験する。「新つれづれ草」には、第2号から参加。



手塚治虫が
大好きだった少年時代
そして就職先での苦難の日々

生まれたのは青森です。南津軽郡というところでした。家族構成は父と母、兄と姉と僕と妹の4人きょうだいでした。僕が小学校にあがる前ぐらいに弘前に引っ越しました。父は地方公務員で学校の事務をしていました。兄は勉強ができたんですが、僕はまともに勉強なんかしたことがなかった。子供の頃は昆虫が大好きで、セミとかバッタとかを追いかけてばかりで、そんなことを言うとう手塚治虫みたいですけど、まあ今言う落ちこぼれですね。ただ、ビリになったことはなかったです。学校で先生の話の聞かなくても、マンガから知識を得ていたのかもしれない。

そう。手塚治虫が大好きでした。『白いパイロツト』とか『勇者ダン』。それから『W3』（ワンダース

リー。あれは素晴らしかったですね。手塚先生にはいちどファンレターを出したことがありましたけど、特に返事とかは来ませんでした。まあ当たり前ですけど。あんな忙しい人が返事をくれるわけないですよ。

小学生の頃、同じクラスに絵のうまい男の子がいて、その子は鉄人28号などの絵を描いて友だちにあげていました。僕は図工の時間に描いた絵が教室に張り出されたりして……。今でも覚えているのは、先生に「マンガ家になれる」と言われた事です。近所の友だちを集めて、マンガ本を見ながら模写をしたこともありましたけど、単なる遊びです。そういうえば、うちの姉もマンガを描いていましたよ。僕なんかよりずっとうまかったですけどね。それから父も絵を描く人でした。油絵でしたね。どこかに出展していたような気がします。でも、自分は絵描きの家系とかそんなことはまったく思いませんでした。

父はすごくワンマンな人でした。僕の話なんか聞く耳持たなくて。お前はここに行くんだという一方的な感じで、中学を出たあと名古屋の会社に就職させられたんです。名古屋にすごく遠い親戚の人がいて、その人の紹介でした。就職したのは名古屋の上小田井というところにある染物工場でした。反物がどこから運ばれてきて、それをものすごく大きな樽に入れて色抜きをして出荷するという。

マンガですか？ はい、染物工場にいたときもマンガは古本屋で買って読んだりしてました。でも、僕がいない間に、同室の先輩が勝手に捨てちゃったことがあります。本当にひどいなあと。その会社はいじめがすごかった。僕は夜間高校に行かせてもらっていたんですけど、「学校に行ってるくせに、こんなこともわかんないのか」って。上司が二人いたんですけど、両方からいじめられました。もうこんなところにはいられない！



小学 4、5 年生の頃、青森ねぶた祭りに父と兄と僕の三人で行ったときの写真。
右が僕で、左が兄。



右の写真と同じ時に撮影。
右が僕で、左が父。



小学 4、5 年生の頃、弘前駅のホームで友だちと撮影。右から 3 番目が僕。

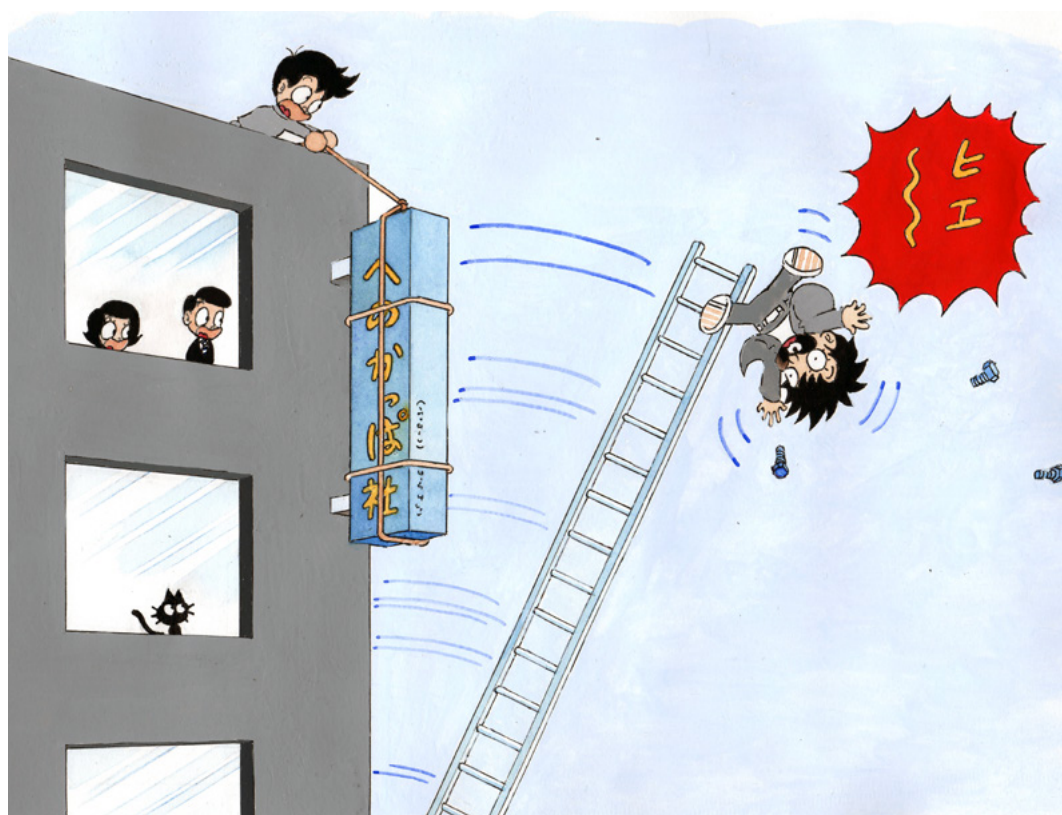
ということ、2 年ぐらい勤めたあと、前述の親戚の人の紹介で、同じ名古屋の鉄工所に移りました。そこで旋盤工をやっていたんです。でもその会社社長に告げ口をする同僚がいて、そいつと合わなかったんです。僕、そういうのって許せないんですよ。

それで結局その鉄工所も 2 年で辞めちゃいました

た。もう名古屋は嫌だ！（笑） ということ、弘前に戻ったんですね。実家でブラブラしていたら、父が怒りまして。それで行ったのが弘前にある看板屋です。ええ。まだそのときは十代だったと思います。僕が主にやったのは看板の取り付けです。田舎の建物ですから、そんなに高いビルとかはないんです。せいぜい 5、6 階ぐらい。でもそれでも高いんです。

すよ(笑)。街のあちこちの建物にハシゴをかけてのぼるんですけど、高所恐怖症でしたから、こわいこわい。もう足はガタガタ。手も震えてね。看板屋では絵を描くことはなかったです。映画の看板で文字を書くぐらいでした。でも上手な人はいましたよ。映画の小さな写真を見ただけで、あんなにでかいのに描くんですから、あれは才能です。やれと言われても僕にはできません。先輩は厳しかったですね。いつも怒られてました。どこに行っても合わない人っているんですね。僕は相手に合わせるタイプじゃないですから。だから駄目なんです。

その頃はそのまま弘前で終わるものか、と思ってましたね。とにかく東京に行きたかった。それで2年ぐらいでその看板屋を辞めて職安に行きました。東京のどこかで働くところはないかと。家にも、あの父はいるし。先のことはまるで考えていませんでした。



看板屋で働いたときは、高所恐怖症で怖い思いをした。
(イラスト／高見沢 和)

でも、マンガが好きだという漠然としたものがどこかにあったんでしょうね。手塚治虫の「マンガの描き方」と石森章太郎の「マンガ家入門」。その2冊を読んで、道具を揃えて描き始めました。でも最初はペンがうまく使えなくて。どうすればこんな線が描けるんだろうという感じでした。



練馬区富士見台に住んでいたのは、1980年代後半から1990年代のころでした。「虫プロダクション」の近くに小さな商店街があって、僕の住んでいたアパートは商店街をぬけてすぐでした。



上京して村野守美、そして
上村一夫のアシスタントに

東京では文京区にある製本会社に勤めました。後楽園の駅から歩いて10分ぐらいのところでした。そのあと2つか3つ会社を変えましたけど、そうこうしているうちに食うにも困るようになって、した。当時、僕は練馬区の富士見台に住んでいて、そこには旧手塚治虫邸があったのですが、村野守美先生の家も近くにありましたね。そこで、村野先生のアシスタントになれば何とか食べられるんじゃないかとマンガの原稿を持って会いに行きました。先生は「ずいぶん黒い原稿だなあ」と。僕、夜の闇を描くのに、墨汁を塗りたくっていたんですよ。それが良かったのかどうか、次の日からアシスタントに来るように言われました。

当時村野先生はたまにしかマンガ原稿を描きま

せんでしたし、アニメ関係の方が来て打ち合わせか何かやっていました。そこで僕が先生のところで何をしたかというと、家の掃除とか犬の世話。あとは電話番号とか。雑用係が欲しかったのかもしれないですね。先生は厳しい方で、毎日怒られていました。何かすると怒る。何もしなくても怒る。じゃあどうすればいいの、と（笑）。食事は出ましたけど。でも「好意で出してやってるんだ」みたいに感じました。

結局1か月ぐらいで辞めました。辞めると言ったら先生怒りましたね。「じゃあ辞めればいいじゃない」って。結局アシスタント料はもらえませんでした。実際雑用ばかりやっていてアシスタントはやってなかったのですから。先生にしてみれば、絵は下手で使えないから雑用をさせながら教えてやろうと、内弟子感覚で置いてくれたのだと思います。当時の僕はそんな風に考えられなくて、先生は独裁

者で、怖くて怖くてお金払ってほしいけどとも言えないと思っていました。

そのあと、上村一夫さんのアシスタントになりました。描いたマンガを先生に見てもらってから、「じゃあ来いよ」って。上村先生のところでは月7万円もらいました。食事もしました。近くの食堂から出前を取ってもらって。当時のアシスタントは5人いました。そのうちの一人がKINKANさんです。彼とはウマがあつたんでしょうね。くされ縁というやつで、今でもつき合いがあります。KINKANさんを始め、アシスタントはみんな優秀な人たちで、短時間ですいすい描いちゃう。僕はさっぱり上達しなかった。野球にたとえると、プロ野球の選手のなかに、草野球の選手がいるようなものです。そんなところでは長続きしません。それでも3か月ぐらいいましたかね。

上村先生の仕事ぶりで一番印象に残っているの

は、描くスピードがすごく速かったことです。先生はお酒を飲みながら描くんですけど、手が震えていのによく描けるなあと。そうしないと週刊連載なんかできないんですね。しかも描くのが速いだけでなく、そのあとの修正もほとんどない。あれこそがプロだと思いました。僕はお酒は飲まないんですけど、飲まなくてもあのスピードは無理(笑)。



果たせなかったプロデビュー
それでもマンガの旅は
まだまだ続く

村野先生と上村先生のところに行ったのは、20代前半の頃でした。マンガは…描いてはいましたけど、落書き程度のもんです。それでもいくつか出版社に持ち込んだりしました。行ったのは小学館と集英

出版社に持ち込みをしていた作品のひとつ「アクマちゃん」採用になりました。



社それに白泉社。学年誌とか「コロコロコミック」とか。ちよつと残念に思うのは、もう少しで学年誌に採用というところまで行つたんです。編集の人に、あそこをこうしろ、とか、ここをああしろと……。具体的に言うと、主人公が幼児なのでもつと大きな子にしてとか……。僕は小さい子の方が面白いと思つていたので……。そこでちゃんと言うことを聞いていれば掲載されたんじゃないでしょうか。

上村さんのところを辞めてから持ち込みはしてないです。ほとんど非正規社員として働く毎日です。運送屋とか、物流関係の仕事をするようになりました。物流関係なら体力さえあれば誰でもできますからね。とにかく毎日どうやって食べていけばいいか。そういうことだけです。もう少し持ち込みを続けていれば、人生変わったかもしれないですね。今さらそういうこと言つてもしょうがないですけど。

そういうえば、僕が上村先生のところにいたとき、

父が来たことがありました。さすがに仕事場まで来ることはなかったですけど、僕のアパートに泊まりました。東京見物に来たとか言つてましたけど、どこにも行かなかつたんじゃないでしょうか。夜、アパートの近くにある食堂で晩ご飯と一緒に食べました。でもあんまり話はしませんでしたね。というかあんなワンマンな人と話したくなかつた(笑)。でも父からしたら、僕の様子を見に来たんでしょうね。東京で何やつてるんだという感じだつたんじゃないでしょうか。そんな父も今はいませんけどね。

きょうだいのなかで今でも仲がいいのは妹です。結婚して横浜にいるんですけど、2人の娘がいて、もう孫もいます。兄とはあんまり仲は良くないですね。兄は昔で言う電電公社に勤めていて、定年退職して悠々自適みたいです。なんだか山登りが趣味みたいで、どここの山で撮つた写真の年賀状が来ますよ。まあ仲が悪いといつても、年賀状ぐらいは来

ますけどね(笑)。

あと、僕の母の妹、叔母さんが弘前にいるんですけど、その人に色紙をよく送っていました。動物とか描いて。でもその叔母さんはいま施設に入ってい



トキワ荘まつり。トキワ荘当時、マンガ家の人たちが良く言った、ラーメン屋「松葉」の前で。

るみたいで、連絡が取れないんですよ。娘さんがいるんですけど、その人に手紙を出しても音沙汰がない。僕としてはそれ以上何もできないというか。

確か2、3年前、まだ叔母さんが元気な頃、というかちゃんと歩いて普通にしていた頃、弘前の家まで行ったことがあったんです。そのとき、家の中に、僕が送った色紙が何枚も額の中に入って、ずらっと飾ってありました。何かの役に立てればと思って送っていたものが、あったんです。

「新つれづれ草」で描くことになったのは、KIN KANさんに誘われたからです。多少考えて、じゃあやってみようか、という感じでしたね。決心するまで時間がかかったのは、こういうものを描こうかと考えていたのがありますし、僕みたいな人間が描いてもいいのかなというのもありました。

手塚治虫は「バーゲンに出すほどアイデアはあるんだよ」と言っていたらしいですけど、僕も描き

たいものは山ほどあります。ただ、描くのに時間はかかりますね。ひとつのテーマがあるとしたら、そこからどうすれば面白くなるかを考えます。以前、「ウインナー競争」というマンガを「新つれづれ草」に描きましたが、ウインナーの大食い競争の話ですね。あれは所沢のスーパーマーケットで、月に一回、ウインナーの袋詰め放題というのがあったんです。そこで小学生の女の子が周りのどの大人よりもたくさんウインナーを詰めるんですよ。すごく小さな袋なのに、どうしてそんなに入るのかわからないんですが、そのエピソードをもとにして、どうすればもっと面白くなるかを考えてできたのがあの「ウインナー競争」です。ちなみに、そのウインナーの袋詰めをしていた女の子に、あなたをモデルにマンガを描きたいと言ったら、断られました。警戒されたんでしょうかね（笑）。

●インタビューを終えて

高見沢さんのシャイな語り口のなかに、マンガへの情熱を垣間見ることができました。ご家族の話や就職したときの喜怒哀楽なエピソードも興味深かったです。「新つれづれ草」のマンガのなかでも、屈指の可愛らしさを誇る高見沢さんの作品は、どんどん進化中なのですね。

文・中島泰司

2017年4月26日

東京練馬駅近くの喫茶店にて



自画像：高見沢 和